

(トップページ : <http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(サウジアラビア : <http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/SaudiArabia.html>)

(写真は語るシリーズ : <http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/PhotoEssay.html>)

マイライブラリー : 0 1 9 5

2011.8.19

前田 高行

写真は語るシリーズ : 「I shall return!」 : イエメン大統領の帰国問題に悩むサウジアラビア



上の写真は8月7日にリヤドの病院を退院しリハビリ中のイエメンのサーレハ大統領の姿である。彼は6月3日に首都サナアの官邸内モスクで金曜礼拝中に爆弾事件に遭遇して重傷を負い、サウジアラビア差し向けの特別機でリヤドに運ばれて集中治療を受けていた。

事件は当初反政府軍によるロケット砲攻撃と報じられたが、その後の調査で何者かがモスク内に仕掛けた爆弾によるものであることが判明した。全身に火傷を負い生命も危ぶまれる重態であったが、先端医療設備の完備したリヤドの病院で奇跡的に回復し、現在市内の迎賓館に滞在している。余談であるがサウジアラビアの病院は外国製の最新設備と優秀な外国人医師団を抱え医療水準は非常に高い。2009年にはナイジェリアのヤラドゥア大統領(当時)が心臓病治療を受けるなどアラブ・アフリカ諸国から頼りにされているほどである¹ (但しサウド家の王族自身はどういう訳か治療手術は外国特に米国の病院で受けている)。

不死鳥のごとくよみがえったサーレハ大統領はイエメン国営 TV を通じて回復ぶりをアピールし16日には帰国の決意を表明した。第二次大戦中、日本軍の猛攻のためフィリピンから撤退するときのマッカーサー将軍のセリフ「I shall return! (私は必ず戻る!)」そのままである。サーレハ大統領が治療のためイエメンを離れる時、イエメンの国民も諸外国も彼が辞任することを秘かに望んでいたが、彼は大統領職を手放さず副大統領を臨時代行に指名しただけであった。そして健康を回復するとリヤドから国政をリモートコントロールし始めた。独裁者の面目躍如であり誰も彼を押しとどめることができない²。

困ったのがサウジアラビアである。爆破事件前、四分五裂したイエメン情勢解決のため諸外国

はこぞって独裁者サーレハの退陣を迫った。サウジアラビアも GCC の総意として彼の退陣を骨子とする調停に乗り出した。イエメン国内の反政府勢力、そして副大統領以下サーレハ以外の政府首脳も GCC の調停案に同意しイエメンの混乱は平和的に解決するかに見えた。しかし最後の土壇場でサーレハは調停文書への署名を一度ならず三度も拒否したのである。

サウジアラビアがサーレハ大統領をリヤドに迎え入れた動機はいくつかある。人道的な観点から見れば、同じアラブ人或いはイスラムの同胞としてのサウジアラビアの惻隱の情の発露とみることができる。砂漠の民ベドウィンの末裔であるサウド家には「武士の情け」、「窮鳥懐に入らば獵師もこれを撃たず」の伝統がある。また困っている同胞を助けることはイスラム教徒としての当然の義務である。

しかしこのような人間臭い動機的一方、外交問題解決のための打算の心理が働いたことも間違いないであろう。サウジアラビアが今最も恐れていることは「アラブの春」が自国に波及することである。言うまでも無く西のエジプトではムバラク独裁体制が崩壊し、南のイエメンは内戦状態である。東のバーレーンでは多数派のシーア派住民が少数派のスニ派王家と衝突、サウジアラビアの治安部隊派遣によりかろうじて小康状態を保っている。北のシリアでもアサド政権による弾圧が激化している。四方を紛争に取り囲まれたサウジアラビアは外交的手段によって何とか燃え上がった「アラブの春」の炎を消し止めたいのである。

サウジアラビアはサーレハ大統領が辞任し野党を交えた挙国一致政権ができれば鎮静化すると踏んでいた。そのため GCC の総意としてサーレハの辞任と、その見返りとして彼に対する訴追権を放棄させる、と言う調停案をまとめた。しかしサーレハが三度にわたりこれを拒否したために事態は膠着したままである。サウジアラビア政府の本音はサーレハがリヤドに滞在している間に復権をあきらめて大統領職を辞し、そのまま亡命という形でサウジアラビアにとどまってくれることであろう。

しかし今やイエメン国内は民主勢力、部族勢力、南部独立勢力(旧南イエメン共産主義者の残党)或いはイスラムテロ組織「アラビア半島のアル・カイダ」などあらゆる種類の勢力が跋扈して収拾がつかない状態である。サウジアラビアが恐れているのは民主勢力だけではない。両国国境付近を根城にサウジアラビアを越境攻撃する部族・宗教混合のフーシー派はサウジの頭痛の種である。また共産主義者とアル・カイダ組織は全く性質が異なるが、サウジアラビアにとってはいずれも脅威の種である。

これまでは独裁者サーレハ大統領がこのような勢力を抑え込んでいた。その恩恵を被っていたのがサウジアラビアであり、そのため同国は陰に陽にサーレハを支えてきたのが実情である。実は米国も同じような目的で独裁者サーレハを支援していたことは周知の事実である。米国は中東の民主化を声高に叫ぶ一方でエジプト、イエメンでは独裁者を支援するという「ダブル・スタンダード」政策をとってきたのである。

それはともかくサウジアラビアとしてはイエメンが内戦化することは何としても避けたいところである。今はラマダン中ということもありイエメン国内ではあまり表立った動きは見られない。

しかしラマダンが終われば再び「パンドラの箱」が開き、混乱は必至であろう。権謀術策にたけた独裁者サーレハが事態解決の切り札になる可能性がないとは言えない。但しその反面彼の帰国により事態がますます泥沼化する恐れも大きい。

ベドウィンの流儀に従うならサウジアラビアは客人サーレハの望みに従い彼を再び専用機でサナアに送り返すのが仁義にかなっている。帰国したサーレハが国内の混乱を鎮め、しかる後に政権を譲り渡して退陣してくれるなら願ってもないことである。しかしその期待は甘すぎるかもしれない。サーレハが権力を手放さず反政府勢力と内戦状態になり、それにつけ込んで「アラビア半島のアル・カイダ」がサウジアラビアを含めた半島全体に跋扈するようなことになれば目も当てられない。サウジアラビアとしてはサーレハの帰国の希望を聞き届けるか否か、実に悩ましい問題である。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

¹ 「写真は語るシリーズ：独裁者の駆け込み寺サウジアラビア」参照。

<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0184ExileAliSaleh.pdf>

² Arab News on 2011/8/17, 'No stopping Saleh from returning to Sanea'

<http://arabnews.com/middleeast/article489554.ece>